数の生死をもったものを衆生という。これが凡夫です。菩提からいうと無生といえる、不生不滅である。生が無生にふれる。無生の生、生という形で無生にこたえる。こういう意味で願生というところに、凡夫をこえるような宗教心をあらゆる凡夫に開いてくるのが国である。宗教心が上に超越するのではなしに下に超越するというようなものが、願生です。上に超越するという形が菩提心ですが、下に超越してくる。包越といってもよい。包越的な形をとったものが願生心である。こういうような色々なことがありますが、まあそこまでにしておきます。

（本稿は、昭和四十二年一月十七日大谷大学における講演の筆録である。文責　本多弘之）

信心の罪

信心の罪といい得るものは、信心自身が自らの内に見出す罪でなければならない。自らに背反するものとして自らが自覚するものでなければならない。しかも信心はこの自覚によって却って信心となるのである。胎宮とはとざされた世界である。それはむしろ世界ならざる胎宮である。開かれたる世界に於いてあらしめられつつ、却ってそれを閉鎖しているのが胎宮である。

（『親鸞教学』第九号所載「時熟」より）